

医ケア児に通学車両

日常的に医療的ケアが必要な子ども(医ケア児)を対象に専用の通学車両を運行する都の事業が、秋にも始まる。自宅で「訪問教育」を受けてきた子ども車両を利用して学校に通える可能性がある。ただ、人材確保などの課題があり、完全実施までには時間がかかりそうだ。

【賀川智子】

文部科学省によると、支援学校全18校の児童・公立の特別支援学校に通う医療的ケア児は昨年5月時点で8218人。2016年の調査では、通学児童のうち6割以上が登下校に、15%は授業に保護者が付き添う。共働きの親は一方が仕事を辞めざるを得ないなど負担がかかっており、通学車両運行は保護者の送迎負担の軽減にもつながる。

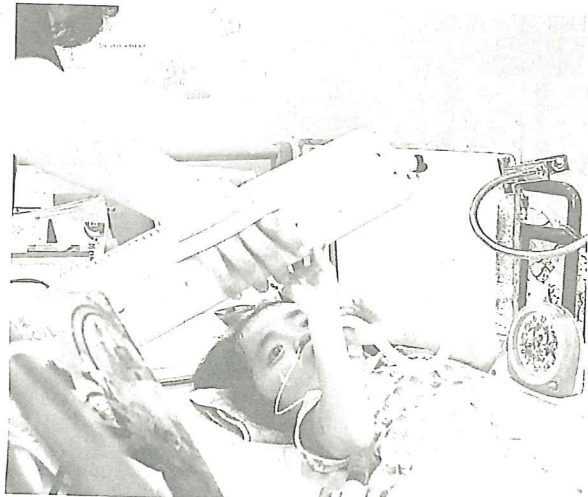
対象は医療的ケアが必要な肢体不自由児の特別

支援学校全18校の児童・生徒。都は専用車両を導入するため6億円の予算をつけた。5月以降、対象となる約200人の保護者に意向を調査しており、それを踏まえて順次準備する。

ただ、車両運行には、医療的ケアに熟練した看護師が必要。車両も既存のマイクロバスでは難しく、当初は対象児も限られる。

通学を待ち望む子どもも少なくない。

都、秋にも運行へ 課題は人材確保



自宅のベッドで授業を受ける山田萌々華さん＝都内で

「はーるの おかわは、業。萌々華さんはベッドで横になり、担任の先生の伴奏に合わせて歌う。5月下旬、都内の家庭の一室にかわいい声が響いた。都立光明学園(世田谷区) 肢体不自由教育 2時間の授業を受け、終了後、慣れた手つきでタ部門小学部4年の山田萌々華さん(10)の音楽の授業を書いた。

萌々華さんは生まれつき骨形成不全症という病気で、寝たきりで人工呼吸器やたん吸引の機器を使う。人工呼吸器を付けると安全面からスクールバスに乗れず、両親も共働きで送迎できないため、教員が週3日、萌々華さんの自宅で教える「訪問教育」を受ける。「学校に行ってお友達といろいろお話したい」と萌々華さん。母美樹さんも「勉強と生活の場が同じだと、気持ち切り変わらない」と言っ。3年後は中学生。焦りも感じる。「いつ乗れるようになるのか、具体的な時期を知りたい」。都の担当者は「通学のお子さんだけでなく、訪問教育の子も対象になる。比較的症状が安定している子から順番に進めていきたい」と話している。

18-6-29
M